

平成 22 年度活動報告

京都大学大学院
アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授
高田 明

1. 自分自身の研究テーマについて

南部アフリカの狩猟採集民として知られるサン(ブッシュマン)をおもな対象として、次の4つの領域において研究を進めてきた。(1)養育者-子ども間相互行為、(2)生業や人口構造と養育者-子ども間相互行為との関わり、(3)環境認識、(4)エスニシティの変遷。さらに、これらの研究を関連づけて、サンの社会的相互行為を組織化する文化的構造を明らかにしようとしている。本派遣の目的は、こうした研究に関してさらなる資料の収集・分析を進めることである。

2. 派遣の内容

(1)米国・ベルギー等派遣（平成 22 年 2 月 21 日～3 月 27 日）

平成 22 年 2 月 21 日から 3 月 27 日にかけて、米国のカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)言語・相互行為・文化研究センター(CLIC)およびベルギーのリージュ大学人文・社会科学研究所に滞在して研究活動を行った。

CLIC では、同センターの客員研究員として所属し、“Linguistic anthropological study of responsibility formation in early caregiver-child interactions”という課題について共同研究を行った。具体的には、CLIC を構成する教員らが開催する各種のセミナーに継続的に参加し、自身の研究発表も 1 回行った。また UCLA が所蔵する豊富な文献を活用した研究資料の収集、さらにロサンゼルス在住の日系家族を対象とした養育者-子ども間相互行為に関するデータ収集を行った。



写真 1 UCLA の図書館



写真2 Bruin Bear (UCLA のマスコット) の像

リージュ大学人文・社会科学研究所では、同研究所で開催された国際シンポジウム“Towards an anthropology of childhood and children”に参加し、“Responsibility formation in early caregiver-child interactions among the !Xun of North-Central Namibia”というタイトルで発表を行うとともに、関心を共有する研究者と研究打ち合わせを行った。これによって自分の研究に関して貴重な示唆を得るとともに、近年世界的に活発になりつつある「子どもの人類学」に関する最新の研究動向をつかむことができた。

3. 派遣中の印象に残った経験や体験

CLIC は、社会学の歴史に燦然とその名を残すであろう会話分析の泰斗 Emanuel A. Schegloff 博士, E. Goffman や G. Bateson の教えを受けて生態学や身体性という視座から独自のコミュニケーション研究を構築してきた Charles Goodwin 博士, 現代の言語人類学や言語的社会化論をリードする Elinor Ochs 博士, Alessandro Duranti 博士, Marjorie H. Goodwin 博士などを要する、総合的コミュニケーションの分野ではまさに The Center of Excellence の名にふさわしい研究組織である。報告者（高田）はこれまでも CLIC に客員研究員として滞在したり、CLIC に所属する研究者を日本に招聘したりして研究上の交流を深めてきたことから、今回の長期滞在が可能になった。

CLIC には同センターに常時在籍する教員・大学院生だけではなく、世界中から優れたシニア・若手の研究者が頻繁に訪れ、日常的に活発な議論を行っていた。また、授業やセミナー等での議論以外に、食事をともにしたり、芸術鑑賞やハイキング等に連れだつて出かけたりの機会にも研究上のアイデアを育てることが印象的であった。報告者もこうした研究のネットワークに参加しながら研究活動を推進していきたいと強く感じた。

4. 目的の達成度や反省点

平成 22 年度は、年度の終わりに近い 2 月半ばからの渡航であった。平成 23 年度に引き続き CLIC に客員研究員として在籍しながら研究活動を進めていくため、平成 22 年度は UCLA での行政的な手続き、住居等の生活全般に関わる状況の整備などを行う必要があり、これらにかなり時間をとられた。しかしながらこうした状況にもかかわらず、現地の研究者や友人が報告者を暖かく受け入れ、さまざまな面でサポートしてくれたこともあって、スムーズに研究活動を開始することができた。

5. 平成 23 年度の派遣における課題と目標

平成 23 年度は引き続き CLIC に客員研究員として在籍し、総合的コミュニケーションに関わる共同研究を進めていく予定である。CLIC の人材や研究資料は極めて豊富で、長期滞在とはいえこれらすべてを滞在期間中に消化することはできそうにない。自分の総合的コミュニケーション研究の推進につなげられるように、活動の焦点を絞ってそこに深く関わっていくことが重要になるであろう。

また年度の後半には、ボツワナでのコラボレーション調査とアウトプット研修を予定している。報告者は、博士研究以来ボツワナで約 15 年間にわたって調査を続けてきた。コラボレーション調査とアウトプット研修を成功に導くためには、この研究蓄積を活かしながら、これまであまり交流のなかった現地で活動する NGO、政府、国際機関の実務家らとも社会的なネットワークを構築していくことが課題となるであろう。